

水稻早期栽培におけるツマグロヨコバイ防除試験

糸賀 繁人*・原 敬一*

関谷 昭二郎*・堀切 正俊*

ITOGA, S., HARA, K., SEKIYA, S. and HORIKIRI, M. Control of Green Rice Leafhopper (*Nephotetix pipunctatus Cincticeps*) in the Early-Sowing Cultivation of Rice Plants.

水稻早期栽培において本田初期のみのツマグロヨコバイ防除と、萎縮病の発生との関係を明らかにするため、32年度に揖宿郡喜入町において現地試験を実施したので、その概要を報告する。

試験方法

試験地の大丸、田貫では、本田移植直前に1回（マラソン粉剤）、その後10日おきに3回（パラチオン或はPB粉剤）計4回、本田生育初期にツマグロヨコバイを対象とした畦畔防除を行った。調査はウシカ類の

鹿兒島縣農業試験場

密度、及び萎縮病の発病状況について定期的に実施し、参考のため試験地に近く一般防除を実施している喜入、米倉を対照区として取扱った。

ツマグロヨコバイの防除効果

試験地の大丸においては対照区の喜入に比べ6月上旬まで各調査時とも常に圃場密度は低めに経過しており、相関図表では5%の危険率で両地点の差は有意である。一方、田貫と米倉との間は、米倉においてマラソン乳剤を主体にした個人防除が比較的徹底して行われたため、圃場密度は前者（大丸：喜入）ほど判然と

した差はみとめられないが、相関図表では田貫<米倉の傾向がうかがわれる。試験地では水田の周辺をふくめた畦畔防除を行つたために畦畔での密度は更に低下しており、対照区との差は水田より一層顕著になつてゐる。なお4回にわたる薬剤散布によつても試験地の大丸、田貫ではツマグロヨコバイの密度を徹底的に抑圧することはできなかつたが、この原因として面積がせまかつたこと（両地点とも約1町歩づゝ）と、予察灯でも明らかなように5月下旬～6月にかけて本種の動きが活潑となり外部よりの成虫の飛来侵入が考えられる。

萎縮病の防除効果

萎縮病の発病推移状況は各地とも5月13日初発してより6月上旬までの間はあまり変化がなく、6月上旬から下旬にかけて急激に増加しており30、31年の調査結果とはほぼ同様の傾向をたどつてゐる。

試験地の大丸、田貫と対照区である喜入、米倉とを

比較すると、発病株率では初発生より5月下旬までの間は試験地が1%以下、対照区が3%以下というように両者の差はあまり顕著に開いていないが、6月上旬～下旬の急激な増加により差は大きくなり7月下旬の調査では平均発病株率が大丸9.05%に対し、喜入53.20%、田貫6.86%に対して米倉26.40%というように試験地では対照区の $\frac{1}{4}$ ～ $\frac{1}{6}$ におさえられている。

発病茎率の場合も株率の場合と全く同様の傾向をたどつており、7月下旬の調査では大丸1.77%に対し喜入11.89%、田貫1.53%に対して米倉7.13%と $\frac{1}{6}$ ～ $\frac{1}{4}$ に抑圧されている。

ま と め

32年度、水稻早期栽培におけるツマグロヨコバイの防除試験を排宿郡喜入町で実施したが、本田生育初期のツマグロヨコバイの密度を抑圧することにより、萎縮病の発生を防除することができた。